

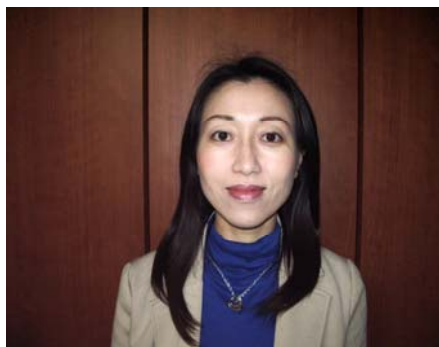


目次

1. FD 推進部専任教員紹介
2. 公開授業報告：教育人間科学部／経済学部／経営学部／工学部
国際社会科学研究所／留学生センター
3. 各部局FD活動報告：経済学部／環境情報学府／留学生センター
4. TA研修会報告
5. 平成 21 年度FDシンポジウム案内

着任あいさつ

FD 推進部特任教員（講師） 安野舞子



昨年（平成 21 年）の 12 月 16 日より、FD 推進部特任教員（講師）として着任いたしました安野舞子と申します。前任校（創価大学）では、「教育・学習活動支援センター」という、教員の「教育支援（すなわち、FD 活動）」と学生の「学習支援」両方の機能をもったセンターの専任教員として、主に FD 研究および実践に従事して参りました。

本 FD 推進部への着任の日、高木センター長がおっしゃった「真に学生のためになる教育改革を是非とも行っていきたい」という一言が、今でも強く心に残っています。以来、日々業務に携わる中で、「学生のためのより善い授業」とはどうあるべきか？、

「学生と共に考える授業改善を！」といった話題が飛び交う度に、本学で FD 活動に携わらせていただける喜びとやりがいを感じています。

と申しますのも、そこに FD 本来の「目的」があると思っているからです。「FD とは何か」ということは、本学においてもこれまで語り尽くされてきたことと思います。日本では一般的に、“狭義の FD”として、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」（文部科学省）と定義づけられていたり、授業改善に限らない“広義の FD”として、「個々の大学教員が所属大学における各種の義務（教育・研究・管理・社会奉仕など）を達成するために必要な専門的能力を維持し、改善するためのあらゆる方策や活動」（Claude）と捉えられる場合もあります。しかし、これらの定義には「何のために教育（授業）を改善するのか」という視点が抜けていると言わざるを得ません。

「FD 先進国」の一つとみなされているアメリカには、FD 担当者のネットワークである POD（The Professional and Organizational Development

Network in Higher Education) という組織がありますが、その組織が定義するFDの中には、「FD活動の目的は、学生の学習活動を促進するためである」と明確に謳われています。また、アメリカに限らず日本においても大学の大衆化が進み、大学教育が「(教員が) 何を教えるか」という「教授パラダイム」から「(学生が) 何を身につけるか」という「学習パラダイム」へと移行していることに鑑みても、「学生の成長」に目的を定めたFDこそ大切になってくるのではないのでしょうか(もちろん、「広義のFD」における目的は学生の成長のみに限らず、教員個人の能力開発/成長が含まれることは言うまでもありません)。

FD推進教員としての私の「夢」は、在任期間中、できるだけ多くの先生方とお会いし、授業について一緒に考えると共に、横浜国大における教育・学習活動はどうあるべきかを語り合い、実践していくことです。仕事柄、FD担当者は、「キャンパスの厄介者”

と捉えられがちのようですが、どうか“一緒に悩み、考え、進む仲間”としてお付き合いいただけますよう、お願い申し上げます。

なお、私の専門は「高等教育論」ですが、FDに専念する以前——アメリカの大学院時代の研究テーマは「高等教育における精神性^{スピリチュアリティ}」でした。学術研究および教育の最高学府である大学は、究極的には「人生いかに生きべきか」という哲学的問いを根本として、学問され教育されるべき場であると思っています。社会に役立つ研究をし、未来を担う人材を育成する崇高な使命を担った大学人として、常に「何のため」と意味を問うこともまた、「教員個人の能力開発/成長」という意味での“広義のFD”に含まれるのではないのでしょうか——。そのような思いも内に秘めながら、今後FD推進教員としての責務を全うして参る所存です。何卒宜しくお願い申し上げます。

平成 21 年度公開授業実施報告

平成 21 年度 教育人間科学部公開授業報告

教育人間科学部 森本 茂

本年度もこれまでに比べて、昨年度学部ベストティチャー賞受賞教員に公開授業を依頼し、平成 21 年 11 月から 12 月にかけて公開授業が実施された。公開授業を実施いただいた教員名、授業題名などは次の通りであった。

11 月 27 日 (金曜日) 3 限

大泉義一 准教授 (美術教育講座)

初等図画工作教育法 (図画工作科の学習指導要領の内容「造形遊び」に関する講義と演習)



12 月 2 日 (水曜日) 2 限:

白石実 准教授 (情報認知システム講座)

計算機のしくみ (人間とメディアネットワーク)



12 月 8 日 (火曜日) 4 限:

小ヶ谷千恵 准教授 (社会ネットワーク講座)

演習 II (Y200:誰にとって住みよい街なのか:横浜市の施策 (子育て支援・外国籍住民・環境・ホームレス・地域コミュニティづくり) とその改善点について)

での考察)



学校教育課程の教科教育法（大泉）、人間科学基礎科学群（白石）および演習（小ヶ谷）と授業目的が異なる、また大人数へのCPUの変遷・現CPUの構造に関する伝達型の講義形式、学生の模擬授業・受講生間での模擬授業に関する話し合い（中規模）から少人数での学生の発表を主体としたゼミ形式まで、異なる視野での授業観察が可能であった。

例年と同じ傾向で、授業参加の教員数が少なく、さらに今年度は大学院生の参加が例年より少なかった。公開授業期間を長くとり、授業実施までの準備

期間、周知の期間を確保する必要性が学部FD委員より提案されている。公開授業のアナウンスポスター以外に、担当者・タイトルとともにFDの観点からのサブタイトル、アブストラクトを配布し、見学側のポイントを前もって提示することも可能ではとの意見も提出された。しかし、授業公開する教員にとって大きな負担となることにも配慮が必要であろう。公開授業担当委員以外のFD委員の出席とともに各専門領域・講座への宣伝を促すことも必要であろう。が、学部全体への動員依頼も賛成は出来かねるが。

ベストティーチャーに加えて学生から評判を尋ねて、ぜひ公開したい、公開してみたいと言ったリクエスト、範囲を狭めた専門領域内での公開も授業内容の重複、必要な基礎知識、発展性を含めて学生を育てる方向性を相互理解する方向での効果的方法かもしれない。

蛇足になるが、公開授業の記録を保存する必要もあるが、このところ写真・ビデオに収まることを好まない学生が散見されるため、改善策を論議することも必要になっていると思われる。

経済学部公開授業報告―「双方向型授業」の試み―

経済学部 上川孝夫

公開授業の概要

本年度の経済学部における公開授業は、相馬直子准教授により、2009年12月22日(火)の2限目に「現代社会福祉」という専門科目について行なわれた。場所は経済学部211教室、受講生は約80名であった。

相馬先生は着任3年目で、専門は社会福祉論、近年は子育てや家族に関する福祉政策の国際比較研究に取り組んでおられる。公開授業には上野誠也本学大学教育総合センターFD推進部門長と経済学部委員の小生が参観したほか、学務部から写真撮影担当の職員が出席した。

公開授業の内容

今回の公開授業のテーマは、子どもの生存権保障という視点から、児童虐待問題を考えるというものであった。授業の冒頭で相馬先生は、前回までの授業のまとめとして、児童虐待の定義、児童虐待対応

件数の推移、児童虐待の実態について、説明された。また、その説明を行うかたわら、児童虐待と世帯の経済状況との相関性、DV被害体験と被虐待経験の関連性などについて、学生に質問を行うとともに、必要な解説を加えられた。



次に本論に入り、前回の授業終了後に学生から出された質問の中に、児童虐待を子どもの視点から見たらどうかという指摘があったことに触れ、この問題の難しさは子ども自身の声をつかみにくいことにあり、子どもの生存権保障の侵害という視点で考えることが重要だと指摘された。この点に関連して、日本には「親権喪失宣言」という手続きがあるが、米国では「親権一時停止」という、より迅速な方法が取られているとの説明があった。

授業の後半では、先生が近年関わってこられた東京都世田谷区の事例に移り、国、東京都、世田谷区それぞれの児童虐待対応策の比較を行ないながら、政策のあるべき姿を論じられた。世田谷区では専業主婦が共働き世帯より多いため、在宅子育て支援が中心であるが、専門家や支援者へのインタビュー結果によれば、在宅子育てで家に引きこもりがちな母親が多い。子育て支援のネットワークの形成も進行中であるが、母親の育児技術を高めるための支援に終わっている。

総じて、児童虐待や子育ての問題を考えるには、福祉政策、あるいは社会政策が十分であるかどうかという、幅広い視点から考える必要があることを強調して、授業を終えられた。

FD委員から見た公開授業の感想

相馬先生の授業には、いくつかの重要な特色があると思われる。第一に、学生に内容を分かりやすく伝えようという姿勢が伝わってくることである。説明は具体的で説得力があり、話すスピードも適切と思われた。第二に、学生との対話を重視している点

である。先生の授業は教壇に立ってずっと話すというスタイルではなく、教室内を移動しながら、ときに学生に質問をぶつけるという方法である。授業終了後に学生に質問表を書かせているが、これが次の授業での学生との対話に活かされている。第三に、授業に用意するレジュメや参考資料も豊富であり、その説明や問題提起の仕方も丁寧である。レジュメにところどころ空白を作っておき、講義の説明にあわせて学生に埋めさせるという方法も採用している。



相馬先生の授業は、このように学生に問題意識をもたせながら授業を行うという姿勢に貫かれており、学生にも好感がもたれているように見受けられた。いいかえれば、学生との一体感が感じられる授業であり、いわば「双方向型授業」の実践例であるように思われた。公開授業の参観者が限られていたのは残念であるが、今後の参考になる授業であったように思われる。

経営学部公開授業報告

経営学部 松井美樹

本年度の公開授業の開催状況

日時：11月27日（金）4時限
場所：経営207教室
担当教員：田名部元成先生
科目名：経営情報論ⅡA
テーマ：「意思決定ツールとその活用」
参加教員：5名

日時：12月3日（木）1時限
場所：経営106教室
担当教員：山岡徹先生
科目名：経営管理論Ⅱ
テーマ：「組織変革におけるエンパワーメント」
参加教員：6名

日時：12月4日（金）3時限

場所：経営106教室

担当教員：高橋正彦教授

科目名：比較金融制度論Ⅱ

テーマ：「各種金融機関の現状－（6）ノンバンク」

参加教員：2名

日時：12月22日（火）4時限

場所：経営106教室

担当教員：中村博之教授

科目名：管理会計論Ⅱ

テーマ：「ABC（Activity-Based Costing）」

参加教員：5名

本年度は田名部元成准教授、山岡徹准教授、高橋正彦教授、中村博之教授の4名の教員が担当する授業を公開していただくことができた。それぞれ工夫を凝らされた授業で、参加した教員（延べで18名）も大いに刺激を受ける内容であった。授業終了後、各授業担当教員と参加教員で意見交換会を開き、公開授業で参考になったこと、取り入れたいと思ったこと、改善したらよいと思ったこと、疑問に思ったこと、公開授業のやり方やより広くFD活動の展開について議論を行った。

田名部元成准教授による経営情報論ⅡAについては、専門的な内容を理解させるため、興味を引く例題が選ばれていること、最後のクイズでその日の授業の復習ができ、かつ出席状況も把握できることが注目された。

山岡徹准教授による経営管理Ⅱは組織変革が主たるテーマで、毎週、課題を出し予習をさせてくれること、PPT、短時間のDVD、板書、ケース等の配布資料を効果的に使用していることが特に印象的であった。

高橋正彦教授による比較金融制度論Ⅱはノンバンクがテーマで、冒頭の時事ネタとして興味深いものが選ばれていること、新聞記事を中心とした資料が充実していることが特筆され、その準備には相当のエネルギーが必要と見受けられた。

中村博之教授による管理会計論ⅡはABCがテーマで、教科書に準拠しつつABC誕生の背景と理論、実習、総括がバランス良く配分されていること、具体的な例や計算問題の演習が効果的であることが指

摘される。

いずれの授業も学生の理解を容易にするように様々な工夫が凝らされており、準備には相当の時間が費やされている。他方、共通した改善点としては、講義科目の場合、教員から学生への一方向のコミュニケーションが主となってしまい、学生からのフィードバックを交えた双方向のコミュニケーション、さらには学生同士の討論によるマルチなコミュニケーションを展開することがなかなか難しいことがあげられよう。グループ討論等を活用して、授業中に学生に考えさせ、議論させるようなことがもう少しあってもよいのではないかという感想を持った。

また、私語をする学生は見られなかったが、途中から寝ている学生も散見され、いくら授業方法を工夫しても学生の集中を90分間持続させることは難しいことを改めて感じさせられた。

公開授業とFD活動の今後に向けて

授業終了後の意見交換会等で公開授業とFD活動全般のあり方についても議論を行った。

公開授業については、年末は多忙なので、別の時期を考えるべきではないか、すべての授業を原則、公開とし、いつでも他の教員の授業を聴講に行けるようにしてはどうかという意見も出された。また、学生による授業評価についてもその活用方法等に関して多少の意見交換を行った。

今後のFDセミナーやFD研究会で議論を更に深めていき、改善を図っていきたいと考えている。

最後に、本年度の公開授業を実りあるものとするためにご協力いただいた教員の皆様、とりわけ4名の授業担当の先生方に心よりお礼を申し上げ、この報告を締めくくりたいと思います。



工学部公開授業報告 羽深等先生「移動現象論」

工学部 上野誠也

受講した印象

ドライヤーを持ち出して、熱の移動の実例を紹介することから授業が始められた。日常生活の例が示されたので、記憶に残る授業である。教卓の固定マイク使った説明は教室のどこに居てもはっきりと聞き取れる。数式の板書が多い授業であるが、黒板の文字だけで、どのように説明が展開したかの記憶がよみがえってくる。板書をノートに写している学生達のノートには一つの物語が作り上がっていくようだ。

授業に心がけている点

授業が終了してから羽深先生に授業で心がけている点を質問した。先生の回答から『』書きで示したポイントをいただいた。

『私の体の正面を学生達に向けて話すように心がけています。』板書のために背中を向けているときは話をせず、書き終わってから説明していた。いつも学生に向かって話していた。

『移動現象が日常生活に身近に関わる話題を紹介します。』特に日常の安全に関わることは学生の意識に残るので、積極的に紹介しているそうである。

『高等学校の物理に少し立ち戻って説明するように心がけています。』受講生は化学を専門とする学生達である。高校時代に物理を勉強しなかった学生や忘れかけている学生がいる。そのような学生の立場で講義の説明内容を考えている。

『企業の研究開発における自らの実体験で実際に講義内容が役立つ例を紹介しています。』さすが工学部。実践性のある話を応用例として、講義内容がどのように活かされているかを意識している。



講義中の羽深先生

授業で工夫されている点

続いて工夫されている点を聞いた。

『試験前にノートを見直した時に、分かるように板書を工夫しています。』黒板に書かれる内容のレベルがそろっている。結果さえ公式として覚えれば使うことはできるが、それに至る考え方を重視した板書である。資料で配布したのでは、おそらく学生は読まないであろうし、授業を思い出すことはできないだろう。

『私語が聞こえた時には板書の間違いを教えあっている場合があるものと意識します。』特に学生を注意することもなく私語のない教室が作られている。話に引きつけられる魅力があり、それが学科の中で Good Lecture 科目として毎年選ばれる理由であろう。

時間外も学生に配慮

この講義には通常講義とは別に問題演習を行う Continuation Class が用意されている。その他にも、病気等の理由で欠席した学生には、欠席日の講義ノートを pdf ファイルで渡すなどの配慮もなされている。これらの時間外の学生への気配りが授業の評価を高めている。授業の質を確保した上での努力が感じられる。

双方向授業の試み——ロースクールにて

国際社会科学研究科 吉村政穂

対象授業について

法科大学院においては、少人数による双方向的又は多方向的な密度の高い教育が行われることを基本とし、その実現のために各教員は授業に取り組んでいる。

民法演習2は、国際社会科学研究科法曹実務専攻（法科大学院）2年次後学期に配当されている選択必修科目である。民法に関する基本的理解・知識を習得していることを前提に、主として債権法領域の事例を中心として取り上げる授業となっている。今回公開授業の対象となったのは、11月24日（火）（渡邊拓准教授担当回）、12月1日（火）（今村与一教授担当回）であるが、以下に授業後に行われた渡邊准教授とのやりとりを紹介する。



インタビュー

——今回は簡単な事例を基にした知識確認から始まった。毎回そうなのか？

（渡）学生のレベルからすると、必ずしも簡単な問題というわけではない。しかしながら、シンプルな事例を前提とした知識確認を行った上で、より応用的な問題（演習問題）に進む授業構成を心がけている。

——学生との質疑応答が中心の授業であるが、答える学生はどういった基準で選ばれるのか？

（渡）演習問題については、事前に指名した学生に

よって参考答案を作成してもらっている。そこで、演習問題と、それに関連した質問は、それらの学生を指名している。

これに対して、授業当初の事例問題（知識確認）



はランダムに当てている。

——授業で用いる問題は、事前に配布しているのか？配布しているとして、具体的にどのような形で周知しているのか？

（渡）演習問題は、授業支援システムを利用して事前に学生がアクセスできるようにしている。

——先ほど、事前に指名された学生が参考答案を用意すると言われたが、それを他の学生が見ることはできるのか？授業時に配布しているのか？

（渡）参考答案の提出も授業支援システムを利用している。他の学生には、授業支援システムにアクセスし、ダウンロードして持参するように伝えている。

——クラスには法学未修者と法学既修者（2年次からの入学者）とが混在している。こういった工夫をしているか？

（渡）知識確認を前提として授業を進めることと、イメージをつかみやすい事例を採用することを心がけている。

——どうもありがとうございました。

留学生センター公開授業報告

留学生センター 四方田千恵

奥野由紀子准教授による公開授業 日本語上級B「きく・はなす」

平成21年12月14日(月)4限、第1研究棟2階CALL教室において留学生センター教員奥野由紀子准教授による公開授業「日本語上級B きく・はなす」が行われた。



受講生は学部1年生を中心とした42名。中国人、韓国人留学生のみならず国費留学生を中心にタイやベトナム等の非漢字圏の学生も多く混じっている。

授業支援システム Jenzabar の活用

まず導入においては前回の授業「浦沢直樹の仕事」に関する意見を Jenzabar の掲示板に書き込む、という課題に対するフィードバックが、Jenzabar 画面をプロジェクターで映しながら行われた。さらに、Jenzabar に添付された音声（インタビュー）を文字起こしする、という課題の点検を兼ねた語彙クイズが Jenzabar の「テスト/課題」機能を使って実施された。

導入を経て、当日の中心的活動に入る。「現代の日本をとりまく様々なトピック」を取り上げる、ということでこの日のテーマは今話題の「婚活」。テレビ番組の録画がプロジェクターに映し出される。また学生には音声を一部文字化した資料が配付されている。学生は配布資料とともに音声を聞きながら、文

字化されていない部分の内容を聞き取ったり、次の段落の内容を予測したりすることで、「きく」力を高めていく。

次にグループに分かれ、本日の内容についてディスカッションし、グループの代表はその内容をまとめて口頭発表することで「はなす」力を身につける。最後にグループで話した内容を筆記係りがまとめて Jenzabar 掲示板に書き込むと同時に、全員が他のグループに対しての意見を書き込む、という課題が出されて授業が終了した。

授業終了後、公開授業に参加した上野 FD 推進部長および留学生センター教員4名は奥野准教授を交えた意見交換会を開いた。Jenzabar および CALL 教室設備を有効に用いた授業方法に大いに啓発を受けると同時に、よりよい授業方法を求めて1時間近く議論を重ねるなど、実り多い公開授業であった。



経済学部「基礎演習」FD講演会・FDセミナー

経済学部 植村博恭

経済学部で2回に分けて開催された「基礎演習」に関する講演会およびセミナーについて報告します。

FD講演会

1. 経済学部の導入教育改革

平成22年より経済学部では、1年生向けの導入教育として新しい「基礎演習」を開講する。これは、今年度から始まった教育GPなどとも連携をとりつつ、導入教育と専門教育を体系的につなぐカリキュラム改革の一貫として行われるものであり、平成22年度には10クラス開講する。

その目的は、1年生に大学における学習の方法を理解させ、文献やデータの検索、本や論文の読み方、レポート・論文の書き方、プレゼンテーションの仕方などのスタディスキルを習得させることである。

2. FD講演会の内容

平成21年12月18日、この新しい「基礎演習」を充実させるため、導入教育の専門家である同志社大学の北尾謙治先生（『広げる知の世界：大学での学びのレッスン』の編著者）をまねき、FD講演会を開催した。

北尾謙治先生の講演のタイトルは「効果的な導入教育とは」であり、講演は以下のような充実した内容であった。



導入教育とは

大学の勉学に学生が円滑に取り組めるためのオリエンテーション的な教育であり、オリエンテーショ

ン、スタディスキル、友だちをつくるホームルーム、ITスキルなど多岐にわたるものである。それは、これまでの初年度教育における教員と学生双方の不満を解消することを目指す。



『広げる知の世界』

学生にスタディスキル、大学、ITなどを教える本が必要と考えた。特に気をつけたことは、学生を批判したり、子供扱いしたりしないことで、むしろ導入教育と専門教育の入門とを一緒に考え、丁寧な個人指導を通して学生を専門家にさせることである。

結論

学部、学科、専攻に合った入門コースを考え、それにスタディスキルズを盛り込む。専門家によるレクチャーと課題を与える小クラスの作業をうまく組み合わせる。それによって、専門教育へつなげる基礎を作るように工夫する。

3. 質疑応答

講演終了後、1年前期における導入教育において、専門教育と連携するというようなことかとの質問があり、専門教育そのものを教えるのではなく専門教育のトピックを上手に入れるよう工夫する必要があるとの回答があった。また、学生に興味を持たせる具体的方法、成績評価の方法、半期で盛り込むべき必要な内容などについて、積極的な質疑応答が行われた。

FDセミナー

1. FDセミナーの開催

FD講演会に引き続いて、平成22年1月15日に、来年度の新しい「基礎演習」の授業内容と授業方法について共通の理解を持つために、FDセミナーを開催し、大変活発な討論を行った。

2. 経済学部有江大介教授による報告

FDセミナーではまず、諸外国の大学における学習スキルの教育について詳しい経済学部の有江大介教授の報告が行われた。内容は、次のようなものであった。

①経済学においてこれまで教員の自主的活動として行われてきた「卒業論文の書き方」に関する学生向けセミナーの内容が紹介された。特に、論文に求められる5つの条件、独創性 (originality of idea)、論理性 (logical consistency)、明確性 (clearness of argument)、表現力 (expression skill)、形式 (writing style) が重要である点が強調された。

②アメリカやイギリスなど諸外国の大学においては、アカデミックな論文の書き方について体系的な授業が行われており、特に論文の形式については明確な教育方法が確立している。日本の大学が学ぶべきところは大きい。

③経済学部において、これまで「学習スキル」を教える体系的授業が必要とされてきたので、来年度新たにスタートする「基礎演習」は大いに期待される。



3. 討論の内容

有江教授の報告に続いて、来年度の基礎演習を担当する教員を中心に、出席者による討論が活発に行われた。



学習目標と授業の素材との関連について

大学における基礎的な学習スキルを修得するという学習目標と文献読解やレポート作成において使用する授業の素材との関連について、活発な討論が行われた。来年度の「基礎演習」の授業で得られる経験を大切にしつつ、授業の素材と授業方法について共通理解を作っていくことが確認された。

導入教育の授業内容と2・3年次の授業内容との関連について

「基礎演習」は1年次前期の導入教育なので、1年から4年までにわたる学習スキルの体系的教育の導入部分を担うものである。その場合、具体的に何をどのレベルで教えるのが適当か等をめぐって活発な議論が行われた。

図書館と情報基盤センターとの連携について

討論の中で、新しい「基礎演習」で使用するための「文献・データ検索マニュアル」を作成することを決めた。その際、図書館の文献検索システムと情報基盤センターと十分に連携をとる必要がある点が確認された。

環境情報学府 教育改善に関するアンケート

環境情報学府 岡嶋克典

環境情報研究院の教員の多くは、工学部や教育人間科学部等の学部授業も担当しており、FD活動は各学部でそれぞれ推進している。しかし、環境情報学府においても教育改善に関する議論を重ねており、

その一環として、平成16年度から、修了式の際に大学院生に「教育改善に関するアンケート」を行い、その結果をFD活動に役立てている。アンケートの質問用紙（裏表2ページ）を以下に示します。

環境情報学府 教育改善に関するアンケート

修了おめでとうございます。本学及び環境情報学府の教育改善のためにご協力ください。

「そう思う：4」 「思わない：1」 「その中間：3又は2」 のいずれかに○してください。

Q1. 教育の理念及び目的が明示されており、それに適った教育が実施されていましたか。	4	3	2	1
Q2. 大学院にふさわしい内容・方法で理論的かつ実践的な教育が行われていましたか。	4	3	2	1
Q3. 十分な数と内容の授業が提供されていましたか。	4	3	2	1
Q4. 授業科目の区分（専門科目、共通基礎科目、選択科目）や配置が適切でしたか。	4	3	2	1
Q5. シラバスに示したとおりの授業が行われていましたか。	4	3	2	1
Q6. 授業の進行についていくために予習・復習を行う時間が十分に確保できましたか。	4	3	2	1
Q7. 教室で授業を受ける学生の数は適正でしたか。	4	3	2	1
Q8. 専門知識の習得及び批判的検討能力、創造的思考力、分析能力、議論の能力を育成するために、授業科目に応じた適切な方法がとられていましたか。	4	3	2	1
Q9. 授業の年間計画、内容、方法及び成績評価の基準と方法が、あらかじめ周知されていましたか。	4	3	2	1
Q10. 授業時間外学習・実習・レポート等を組み合わせることで授業の効果をより充実させるための措置が講じられていましたか。	4	3	2	1
Q11. 授業科目の開設が各学期にバランスよく配置されていましたか。	4	3	2	1
Q12. 成績評価が適正に行われましたか。	4	3	2	1
Q13. 成績評価の結果が、必要な関連情報とともに告知されていましたか。	4	3	2	1
Q14. オリエンテーション・オフィスアワー等を通じて、履修のための指導・支援の体制が十分にとられていましたか。	4	3	2	1
Q15. 教員とのコミュニケーションを十分に図ることができるようなシステムが整備されていましたか。	4	3	2	1

裏面も記入してください。

裏面へ

質問項目は、学府の授業の方法・内容や成績評価、教育内容や学生指導の方法、学生に対する支援体制や教育環境に至る幅広い観点から選択され、学生が大学院の教育をどう評価し、またどのような問題があるかを抽出できるよう構成されている。またこの調査結果は、教授会等において全教員に公表され、各教員の教育改善の参考資料として有効に活用されている。昨年3月に行われた調査結果では、「4:そう思う」と「3:中間」の回答が多く、項目で80%を超えていることから、概ね学府における教育に満足して

Q16. 学生の経済的支援及び修学や学生生活に関する相談・助言、支援体制の整備はされていたか。	4	3	2	1	
Q17. 指導教員及び学府による、修了後の進路のための情報、指導・支援体制は十分なものでしたか。	4	3	2	1	
Q18. 修学のために必要十分な教員が配置され、効果的な教育、研究指導を受けることができましたか。	4	3	2	1	
Q19. 在学中の学習成果、研究成果に満足していますか。	4	3	2	1	
Q20. 環境情報学府の事務職員の対応等は適切でしたか。	4	3	2	1	
Q21. 教育施設（教室、演習室、実験室等）は十分整備されていましたか。	4	3	2	1	
Q22. 研究施設・設備等は十分整備されていましたか。	4	3	2	1	
Q23. 教育環境のバリアフリー化が図られていましたか。	4	3	2	1	
Q24. 教育及び研究並びに学生の学習を支援し、効果的に成果を上げるために必要な規模及び内容の図書館が整備されていましたか。	4	3	2	1	
Q25. あなたは社会人入学あるいは留学生ですか。該当するときは○で囲ってください。学府における社会人・留学生入学と一般入学（特別選抜を含む）による院生の構成比は、教育・研究活動を行ううえでプラスに作用しましたか。	社会人 留学生	4	3	2	1
Q26. 在学中に国家試験など資格取得やコンペティションあるいは学会等での受賞はありましたか。ある場合は、その名称を教えてください	ある	ない			

○ 課程の別と専攻・コース名を記入してください。

〔 博士前期 ・ 博士後期 〕

環境生命【地球環境・生命環境】・システム学【マテリアル・デザイン】・情報メディア環境学【メディア・数理解析】・イノベーション環境リスク【生命環境・セーフティ】

ご協力ありがとうございました。

ご自由にご記入願います。

なお、お答えいただいた情報は、機密を確実に保持するとともに、今後の環境情報学府教育改善評価目的のための統計データとして使用する以外に一切使用することがないことをお約束いたします。

いることが伺える。また、一昨年度の調査結果に比べて平均3.7ポイント向上しており、改善が進んでいることが分かる。しかし、Q4, Q16, Q17が他の項目に比べて相対的に評価が低い（70%弱）ことから、今後さらにこれらの改善に力を入れていく必要がある。特に、Q16は一昨年度に比べ8ポイント減少しており、学生の経済的問題が大学院での勉学活動に障害になるケースが増大していることを示唆している。このように、本アンケートは学府教育全体の状況や問題点を知るうえで有意義であると考えられる。

留学生センターFD 活動の試み（就活支援も視野に入れて）

留学生センター 小川 誉子美 ・ 奥野 由紀子

活発な研究会活動

留学生センターでは毎年 FD 活動の一環として留学生センター主催の研究会を開いてきた。本年度は内外の専門家や留学生センターの客員研究員を講師として招いて6回（2月1日現在）の「留学生センター研究会」を開催し、留学生センター教員のみならず、学内の先生方にもご参加いただいた。以下、その内容について簡単に紹介しよう。

第1回 「世界を駆け巡る日本語教師からの提言－支援の現状と大学に望むこと－」

2009年9月3日（木）に本年度第1回目の研究会として、国際交流基金の池津丈司先生、本大学大学院修了生で客員研究員として来日されていた韓国の忠南大学校の金玄珠先生を講師としてお招きし、標記タイトルで、ロシア・インド・パプアニューギニア・中国・韓国等、世界の各地の日本語教育の現状、そして先生方の実体験を踏まえ、今後の大学での日本語教育がどうあるべきかについてお話しいただいた。



池津丈司先生



金玄珠先生

第2回、第4回、第5回研究会は就職活動支援をテーマに

また、続く3回は就職活動支援に関するものであった。

就職氷河期と言われているこの時期の就職活動は、留学生にとってなおさら容易なことではない。高度人材確保の一環として二つの言語と文化に通じた留学生の採用に企業側が注目し始めたのにもない、数年前からいくつかのプログラムが立ち上がったが、昨年秋の「仕分け」により、留学生の就職活動は、あらたな課題に直面している。



これまで、留学生センターでは、留学生ホームカミングデーにおいて国内外で活躍する卒業留学生の経験談などを披露してもらう機会を提供してきたが、2009年度から、特に日本企業への就職を希望する留学生の大学の「出口」ケアとして、新たな三つの試

みを実施した。一つ目は、ビジネス日本語教育の老舗である財団法人国際日本語普及協会の先生を招いた留学生センター研究会の開催、二つ目は、昼休みを利用した留学生の就職個別相談会の実施、三つ目は、留学生向け就活日本語講座の開催である。

「留学生の就職活動のための『日本語支援』を考える」

2009年9月から12月にかけて全3回開催された標記研究会では、国際日本語普及協会(AJALT)の内海美也子先生、田中啓太先生をお招きし、国際日本語普及協会の日本語授業の実践をご紹介いただくとともに、本学における就職支援の一環としての日本語教育科目の在り方についても議論した。

こうしたFD活動を通じて、留学生センターが提供する日本語教育科目が学生のニーズに合わせて、より多様化するとともに実践的に発展していくことが可能になるであろう。



内海美也子先生、田中啓太先生

こうしたFD活動の成果を生かし、2009年12月には「就職セミナー・留学生向け個別相談会」全5回を開催し、企業OBである留学生就職支援ネットNAPのスタッフを迎え、企業選びや面接のポイントなどについて個別指導の機会を設けた。

さらに、2010年1月には「就活支援のための日本語講座」全7回を開催し、企業文化やビジネスマナーの紹介から、自己PR等、面接対応などを行った。今後もこうした就活支援を視野に入れた日本語教育および、そのためのFD活動を継続していく予定である。

る。

3回 「サイレントウェイによるひらがな導入の実践」

2009年11月24日(火)には早稲田大学大学院の川口義一先生をお招きし、10月以降に来日したばかりの学生(希望者)を対象に、サイレントウェイによるひらがな導入の実践をしていただき、非常勤講師を初め多くの参加者達が興味深く学ぶ機会となった。



川口義一先生と日本語学習者



熱心に聞く参加者達



TA研修会報告

FD 推進部 福富洋志、上野誠也

教員が実効性のある教育を推進する上で、TA(ティーチング・アシスタント)がどのように教育に携わり、教育補助者として如何に力を発揮するかは重要な事項の一つです。これまで教育者の一人としてのTAの役割と責任、学生指導方法など、TAの職務遂行に関わる情報の提供や指導のすべてが担当教員に委ねられてきましたが、今回、FD推進部門として初めてTAの位置づけや学生指導の基本についての研修会を平成21年12月7日に環境情報棟1号棟5階合同セミナー室にて開催いたしました。70名を超えるTA担当者や担当予定者、教職員の出席のもとに、講演とワークショップが実施されました。ワークショップは、小グループに分かれて課題を分担して検討し、その結果を全体に紹介して講師がコメントする形で行われました。

岡嶋委員の司会のもと、まず上野FD推進部門長の研修会開催の意義についての挨拶と、それに続くTAとはどのような職であるのかについて、「SA(スタッフ・アシスタント)との違い」、「できること」、「できないこと」を尋ねる形での講演から始まりました。この講演に続き、東京農工大学大学教育センターの加藤由香里准



ワークショップ中の参加者

教授によりワークショップが始められました。提示された課題は3項目各4課題、計12課題でした。項目と課題の一部を下に紹介しました。いずれも、TAが遭遇する可能性の高い課題であり、参加者の関心をひきました。12課題すべてについて、5~6名程度の小グループが分担検討し、各小グループの代表者が報告する検討結果に対して、加藤先生がコメントと解答を示されました。当日参加できなかった皆さんも、以下の課題について一度考えて見ては如何でしょうか。

課題1 学生との関係

- ・ 学生実験にいつも5-10分遅刻してくるグループがある。また、教員が説明しているのにおしゃべりをしている学生がいる。田中君(TA)はどうしたらいいだろうか。

課題2 実験・実習での対応

- ・ 実験室を巡回していたTAの田中君はガチャンという音に振り向いた。実験台にガラス器具が乱雑に並び、端に置いたメスシリンダーが腕に引っかかって床に落ち、割れてしまった。田中君はどうしたらいいだろうか。

課題3 先生との関係

- ・ TAの田中君は教員に言われるままに準備を手伝った。実験内容については打ち合わせ段階で説明があったし、テキストももらっているのだから概要は理解しているつもりだ。しかし、細かい実験手順などは把握できていない。この日はそのまま帰っても大丈夫だろうか。



受講者の中で説明する加藤由香里先生

ワークショップの後半では、TA 経験者 2 名へのインタビューにより、TA 担当者が様々な局面で苦勞していること、教育を経験することによってその領域の理解が深まったことなどの TA を終えての感想が紹介された。最後の総合質疑では、複数の TA 経験者から業務の内容と給与の関係についての疑問が示された。

教育内容、教育方針を始め、様々な点について教員が TA と十分なコミュニケーションを持つておくことが基本であること、教員と学生の間に立ち、毅然とした態度や距離の置き方によって教員ではできない行き届いたアドバイスができる存在として、TA が教育に重要な役割を持つ存在であることが強く認識された。このような有意義な研修会をリードしていただいた加藤先生に厚く御礼申し上げたい。¹

次年度へ向けて

FD 推進部門の初の試みとして TA 研修会を開催しました。そのために、学内にどのような TA 研修会が望まれているかのアンケート調査を昨年の夏に実施し、その結果を踏まえて内容を

検討しました。学外の経験豊かな講師の先生に研修内容を相談いただき、手本となる研修会を実施しました。今後の TA 研修会は FD 推進部で企画し講師も担当する方針でいます。

開催時期や研修内容について今回の参加者にアンケートをとりました。52 名の参加者から回答をいただきました。

Q1 開催した時期は適切か？

はい 65% いいえ 35%

Q2 内容は適切であったか？

はい 94% いいえ 6%

Q3 研修時間の長さは適切か？

はい 87% いいえ 13%

開催時期は TA 業務が始まる前の 4 月上旬に要望する声が多かったです。さらに、今回は 4 限に開催しましたが、もっと遅い時間帯の方が都合がよいという意見も多かったです。これらの意見を反映して、次回は 4 月上旬の 5 限に開催する計画でいます。

内容は適切であったかという問いに多くは「はい」の回答でしたが、もう少し難しい問いも欲しいという意見もありました。加藤先生の話によりますと、使われた課題は実験担当の教員にインタビューして TA に身につけて欲しい事例を集めたそうです。TA を雇用する側の先生方の意見を聞く機会を持ち、新たな課題を追加する予定でいます。

今回は実験・実習の指導補助を業務とする TA を想定した研修課題が用意されました。学内の TA には、演習や講義時間に受講生と接する業務やレポート採点の補助を担当する TA もいます。全ての業務の課題を網羅して研修を行うことは不可能に近いです。しかし、類似の課題を例として、TA としての心構えを身につける研修会を企画し、教育の質の向上に繋げてくことを目標としています。

¹ FD ニュースレター 6 号に、関連記事が掲載されています。また、12 課題と当日配布の解答集は大学教育総合センターFD 推進部門から入手可能です。

平成21年度 FDシンポジウム

日時 3月26日(金) 13:30

場所 教育人間科学部6号館102(分科会以降は7号館)

《テーマ》

「学士力」を磨くYNU Initiativeの具体化に向けて

本学でいうYNU Initiativeに示されたような「学士力」の目標について、先進的な取り組みを参照し、また、各自が担当する講義科目の方法、内容に引きつけて理解しましょう。

《プログラム》

●13:30~15:10【全体会】

- ・YNU Initiativeの趣旨
- ・講演「山口大学・到達目標型大学教育改善プログラム」
(講師：山口大学大学教育センター長 岩部浩三氏)
- ・グループ討論、全体ディスカッション

●15:30~17:00【分科会】

- 1) 座学・一斉教授
- 2) グループ学習(討論、調査、発表)
- 3) 実験・実習

●17:00~17:30【ふりかえり】

※詳細は別途配布・掲示されるポスターをご覧ください。

※教職員はどなたでも参加可能です(事前申込不要)。

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 11

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成22年3月 発行